

宮城 社会 3.11大震災

<震災遺構のいま> 学びや保存か解体か

被災地の選択（3） 苦悩／石巻の遺族ら、続く模索

学校管理下で前例のない惨事が起きた学びやの行く末を、遺族や住民らが懸命に模索している。

東日本大震災で児童と教職員84人が犠牲となった石巻市大川小。地元では複雑な感情が交錯する。

「どんな写真や映像より校舎が津波の怖さを伝える」「校舎を見るのがつらい。壊してほしい」「行方不明者の捜さが優先だ」…。

震災遺構をめぐる石巻市や宮城県の有識者会合は、大川小を検討の対象から外した。「いろいろな問題があり、検討組織で踏み込むと影響がある」（市幹部）などの理由を挙げる。

亀山紘市長も判断を保留し、大川地区の住民や遺族を含む市民の意見を2015年度内にも集約する方針を示している。

「市や有識者は大川小を震災遺構として残す意味を考えていないのでは」。6月25日にあった住民団体「大川地区復興協議会」の会合で、遺族が切り出した。

協議会は住民126人に実施したアンケートを踏まえて5月、被災校舎全体の保存などを市に要望した。

協議会でも紆余（うよ）曲折があった。12年秋から冬にかけて意見の取りまとめを目指したが集約できず、時期尚早と判断せざるを得なかった。大槻幹夫会長（72）は「記憶が生々しくて本音を話せる段階にない感じがあった」と明かす。

総意を形成する上で転機となったのが、ことし3月の全体説明会だ。参加者が保存、解体それぞれの考えを述べ合った。

大川小を巣立った中高生6人は全部の保存を望む立場で意見を表明し、異論にもきちんと耳を傾けた。「誰も間違っていない」。そんな思いが根底にあった。

大川小の児童を含む複数の家族を一度に失った男性は切望する。「天国の家族は私たちの対立を望んでいない。大川小の在り方を丁寧に話し合っていきたい」

市の震災遺構の候補には3月に閉校した門脇小も挙がる。市震災伝承検討委員会は昨年12月、「津波と火災の痕跡を残す唯一の施設」と市に保存を提言した。

現地では土地区画整理事業が進み、約1000人が暮らす新たな街ができる。住民組織「新門脇地区復興街づくり協議会」は一貫して解体を求める。あるメンバーは「地域の核となる場所に遺構があるのはいかがなものか」と言う。

組織内には異論もある。比佐野信一副会長（69）は「震災を風化させないよう保存するべきだ」と訴え、資料館を併設した災害学習の拠点化を提案する。

学びやの行く末は一筋縄では開けそうにない。

（石巻総局・水野良将、高橋公彦）

【大川小、門脇小】大川小の校舎は1985年完成。地域活動の中心施設でもあった。震災で児童108人、教職員13人のうち児童70人、教職員10人が死亡し、児童4人が行方不明。現在は二俣小の校舎で授業をする。門脇小は1873年創立。震災で被災し、既に下校していた児童7人が犠牲になった。ことし4月、石巻小と統合した。



被災した大川小（上）と門脇小のコラージュ

拡大写真



拡大写真